


 続

 徒然
つれづれ

楽しみ率向上を

桑野 巍

日本通の欧州人が日本人の生活を垣間見て「3つのマが抜けている」と指摘したという。つまり日本人は人間関係（人と人との間・マ）を粗末にしており、心の通った本当のコミュニティを楽しんでいないというのだ。次のマは時間で、遊び時間が極端に少ないとの批判だ。もう1つのマは空間を考えていない。都市部の地価高騰や低賃金で狭い家にしか住めず、家族たちの空間がみすぼらしいというのだ。「当たらずとも遠からず」なのか。それに加えて3つのカも不足しているという。物価（カ）が高い、家（カ）が狭い、暇（カ）が少ない、といい東京、大阪など大都市に住んでいる人は可哀想だと同情しているのだ。

本当は「余計なお世話」と言いたいところだが、日本人に対する悪口やいくらかの焼き餅も「おおきに」といって聞き「もっと厳しく言って」とお願いしたいくらいだ。欧州と日本の生活様式全般の差異、文明文化、環境の違いなどを考えると、単純に比べる方が不自然というべきなのかもしれない。欧州人ととやかく言われなくても、日本人はいまどき多くの人が結構楽しんでいるのが現実で「ご心配なく」を返したい。日本人の多くは過去や現在の環境を土台にして教養、見識、覚悟を持ち合わせ、未来を見つめながら楽しんでいると私は楽観的に見ているからだ。

ただ、どうしても避けられない物質的な貧富の差が見受けられるので、その楽しみ方は多様化していると言わざるを得ない。それでも国民に根付いているのは便利で効率的な、丈夫で長持ちする楽しみ方をみんなが選んでいることで、自分なりの「幸せの時代」を選択しているのではないかと、思う。

人々が楽しみを実現させるにはまず自身や家族が心身ともに健康でなければならぬのはもちろんだ。衣食住の安定も条件になってくる。そして情報の取捨選択も欠かせない。多くの人は幼中老交流など家族中心派だが、そこには心や肌のふれあいの輪が大切だろう。具体的には観光旅行、スポーツ、ドライブ、釣、買い物などだろうか。だが家族の意見が完全一致することは難しい。2人以上になると家族と

いえども年齢差が出たり、感性の違いが歴然として、家長のコーディネートにも限界が見え、時には楽しみが苦しみに一変することもある。

また、勤務先では毎日が残業で「一家で楽しみの時間など取れない」とこぼすサラリーマンも少なくない。「子供たちと一緒に時間だって極端に少ないのに」という家長落第組もいるし「自分の健康を守る方が先」という超繁忙仕事人間も多い。「一家で楽しむためには誰かが何かを犠牲にしなければ」という気持ちがあっても、なかなか割り切れないのが実情ではあるまいか。

それにしても世間では情けない事件、むごたらしい事件の続発で我々はとかく縮み志向になりがちだ。その上このところの世界的な石油高騰は生活を直撃しそうだ。ガソリンの値上がりだけでは済みそうもない雲行きだ。車に家族を乗せて移動する時、つい「もったいない」が持ち上がってしまい、心苦しいというサラリーマンが増えていると聞く。楽しい休日のドライブやウィンドサーフィン、釣なども半減せざるを得ないのだろうか。といて今どき自転車で行くというわけにもいかないだろう。ガソリンの値上りは深刻でどの道家計を圧迫するに違いない。

休日を有効活用して、楽しみ率を向上させようとしても、それぞれに事情があって世の中なかなか思うように回らないものだ。家の中で何かためになる情報でも得ようとしても媒体多けれど状態なのではないか。テレビも新聞も親や子を心配させるような暗い話題ばかり、特にテレビは中身の無いバラエティ番組のオンパレードで、理知も教養も感じ取れないのだから楽しみとかけ離れ、知的好奇心を満たしてくれない。

「楽しみがあってこそ仕事がある」「仕事の中に楽しみがある」「仕事と楽しみの満足感が必要」というが、賢者は「人生は苦しみばかり」と反論する。その苦しさ率を低減し、各自が楽しさ率を倍増させる術を習得し、あしたの糧にしてほしいものだ。

 (自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長)